

# 会報



第29号

編集・発行人 支部長 佐藤 秀明

ほのかな憧れ、そして気の長い話

浅子 逸男

なにをするにつけても愚図である。取りかかるのも遅いし、はじめたにしてもスロースターターである。勉強にかんしては、成果が見えないことがおおいうえに、そのことで人様にご迷惑をおかけすることがなかったので、自分の愚鈍さを気にしないで生きてくることができた。だが、このトシになると「ともが皆 我よりえらく……」といった気分陥ってくる。それでも、最初の論文を書いてから二十五年も経ってしまった「半七捕物帳」論を、ここにきてようやく一段落つけられた。完成したのではない。ひとまず一息ついたところ。五年ぐらい前から何とかしないと抱えこんだまま手放せなくなるおそれを抱いていた。そう感じながらあつという間に五年ほどが過ぎた。たぶん年月の流れがはやすぎるのだ。

半七にはいりこむ前に、卒業論文で

「風博士」を取りあげて以来、坂口安吾とのお付き合いが続いているが、いつのころからか「風博士」や「黒谷村」を初出のかたちで読みたいと思うようになった。だが『青い馬』を揃いで見ることなど考えられなかった。それがおとし目の前にあらわれた。姿かたちを見たいと願ってから四十年は経過しているはずだ。しかし、どうしても手に入れないなどと願ったわけではない。まさに心の奥底で憧れつづけた存在である。面と向かって見ることもない。叶えられず、声を聞くことすらできなかった『青い馬』がみずから姿をあらわしたのだ。大声で問いかけるな。静かにしよう。馬は繊細なんだ。自分から語りはじめるまでじっと待とう。四十年待ったのだ。いまさらあわてることはない。ひそやかな声にとつと耳を傾けよう。

支部大会案内

二〇一九年度 春季大会 於・奈良女子大学

六月八日（土） 午前十二時～

共催 奈良女子大学日本アジア言語文化学会

【プログラム】

■開会の辞

奈良女子大学研究院人文科学系教授（文学部長）

野村 鮎子

■自由発表

柳田國男における「郷土研究」の構成——ペンネーム研究を通して——  
鄭 悦

尾崎翠「こほろぎ嬢」論——分身共同体としての語り手——  
山根 直子

堀辰雄における佐藤春夫——『車塵集』の受容を中心に——  
劉 娟

■小特集企画「日本浪漫派の戦後と西日本発のリトルマガジン」  
趣旨説明・司会  
梶尾文武・白方佳果

発表

・戦後神戸のリトルマガジンと、島尾敏雄・庄野潤三など  
——「光耀」「VIKING」「タクラマカン」——  
西尾 宣明

・「日本浪漫派」から「午前」への接続と断絶

長野 秀樹

・「ポリタイア」と戦後のロマン派

近藤 洋太

コメンテーター

越水 治

質疑および全体討議

■閉会の辞

支部長 佐藤 秀明

## ■研究発表

### 〔自由発表要旨〕

柳田國男における「郷土研究」の構成——ペンネーム研究を通して——

鄭悦

本発表では、民俗学の草創期における柳田國男の「郷土研究」の構成を明らかにするために、第一期『郷土研究』誌（一九一二年三月—一九一七年二月）を取り上げる。複数のペンネームを使い分けるといふ彼の独特な方法を分析し、文学的要素の構造上の役割を検討し、柳田國男の初期思想の形成に新しい視点を提供したい。

柳田國男と文学については、その美文序や紀行文、旧派和歌など文学香の高さが評価される一方、散文的な文体と奇抜な連想に富んだ論じ方が組上に載せられることも多い。しかし、こうした民俗学者・文学者の二つの顔を結

び付けて評価する中、ペンネームという象徴的な文学者行為が〈民俗誌〉という場で発生することに關する研究は、管見には入らなかつた。

そこで本発表では、第一期『郷土研究』誌上に、ペンネームによつて発表された柳田國男の文章に焦点を当てて考察する。現段階の調査で、「川村杏樹」が女性、「久米長目」が山人、「尾芝古樟」が「柱」（神木）に關する内容、というように、ペンネームと主題に密接な關係が存在し、〈自己命名〉と〈郷土事象の命名〉が同時に成立していることが確認できた。（もう一人の自分）を次々に作りつつ、自らが編集する雑誌に様々な文章を寄稿した柳田國男とはどのような人物だったのだろうか。ペンネームと発表文章の關連性はもちろん、過去の作品との關わりやペンネーム間の交渉などを、コンテンツに於いて分析する。

柳田國男が使用したペンネームは十六にもぼる（郷土研究社・郷土研究編輯所・郷土会（一九七六）、『復刻版

郷土研究 別冊』、名著出版）。この全てを駆使して、学問の作業を劇的に展開してきた『郷土研究』時代の柳田國男、このような視点から彼の〈文学的〉な出発点を確認し、再評価することを本発表の目的としたい。

尾崎翠「こほろぎ嬢」論——分身共同体としての語り手——

山根 直子

尾崎翠が昭和七年に発表した「こほろぎ嬢」は、「私たち」という一人称複数形の特異な語り手を用いている。従来「私たち」の正体は謎に包まれていたが、本発表は本文の精読を通し、前作「歩行」と本作の一月後に発表された「地下室アントンの一夜」に登場する小野町子と土田九作であることを明らかにする。「私たち」（九作／町子）は本作にも登場する実在の男性詩人シャープと彼のもう一つの人格であった女性詩人マクラウドの分身關係

を模した作者翠の分身共同体である。翠が典拠とした薄田泣菫や木村毅の論考に拠れば、シャープは自分の心が男性の時はシャープ、心が女性の時はマクラウドとして筆を執り、この二つの人格が「合作」を行なうこともあった。町子は翠の心の中の女性、九作は男性の部分の分身であり、「歩行」から「地下室アントンの一夜」で町子から九作へ語りの主体が交代することはシャープ／マクラウドの人格の交代による創作方法、本作の語り手「私たち」は男女二つの人格が「合作」する創作方法を模した構想と考えられる。泣菫や木村は既存の男性中心的な文学を乗り越え「芸術は性を超越すべきものである」と主張し、その理想形としてシャープ／マクラウドを紹介する。翠はこれに触発され、男女の性を併せ持つシャープ／マクラウドを模した語り手「私たち」を用いたと考えられる。さらに、本作は他作品の登場人物が作者を語るというフィクションと現実の上下関係の転覆が描かれている。

これも従来の男性中心的なビッグマリオン・コンプレックスの構造を持つ小説へのアンチテーゼであり、本作は新たな文学を模索する翠の果敢な試みが表れている作品と言える。

堀辰雄における佐藤春夫——  
『車塵集』の受容を中心に——

劉娟

堀辰雄（一九〇四年十二月～一九五三年五月）の中国古典への関心は、昭和十五年（一九四〇年）頃に始まり年齢を重ねることに強まり、彼の亡くなるまで続いた。小山正孝氏（『断片』『文芸』一九五七年二月号）は、「堀さんが、もし、もつと永く生きていたら——というより、晩年の十年間も、執筆が続いていたら——中国のこともお書きになったのではないかと思う。」と述べている。確かに堀の作品には中国の古典をテーマとしたものはほとんど見られない。わずかにエッセ

イ「一琴一硯の品」（『甲鳥』一九四一年十一月 後に「我思古人」と改題）で堀が手に入れた幾つかの中国の蔵書印について触れているだけである。しかしその一方で、堀は五つの中国古典ノートを残している。

一方、堀の師佐藤春夫（一八九二年四月～一九六四年五月）は、自ら「支那趣味愛好者」の「最後の一人」（『からもの因縁』『定本 佐藤春夫全集 第二二巻』一九九九年八月 臨川書店）だと称し、中国文学関係の作品を夥しく残していた。殊に、彼は『車塵集』（一九二九年九月 武蔵野書院）という中国閩秀詩訳詩集を以て、漢詩の「繼承と先鞭」（江新鳳「佐藤春夫『車塵集』の原典とその成立（其の二）」『汲古』一九九二年六月）の役割を同時に果たし、第一人者となった。

堀夫人の記憶によると、堀は佐藤の『車塵集』によって、「中国の詩の美しさを知った」（堀多恵子「ひとこと」『杜甫詩ノオト』所収 一九七五年十二月 木耳社）。このように、堀晩年

の中国古典への関心において、『車塵集』が大きな役割を果たしていたことは間違いない。堀晩年の中国古典への関心において、『車塵集』は具体的にどのような役割を果たしていたか。今回の発表は、そのことを中心に考えていきたい。

### ■小特集企画

「日本浪漫派の戦後と西日本発のリトルマガジン」

### 〔趣旨〕

敗戦後日本における文学同人誌の群生は、北九州で創刊された詩誌「鵬／FOU」に始まる。同時期に現れた数多くの同人誌のなかでもとりわけ異彩を放つのが、一九四七年に神戸で創刊された「VIKING」である。竹内勝太郎に私淑する富士正晴・野間宏・竹之内静雄の「三人」グループを中心に創刊されたこの雑誌には、直前に終刊となった「光耀」の島尾敏雄・庄野

潤三・林富士馬が参加した。伊東静雄に私淑する「光耀」グループの合流によって、本誌は戦後における日本浪漫派の伏流を支える雑誌となった。

同じころ、北川晃二を中心に、戦中の「こをろ」の後継誌として九州発の雑誌「午前」が創刊された。谷川雁、大西巨人ら九州出身の若手文学者のほかに、檀一雄、佐藤春夫、旧「光耀」の面々（島尾・庄野・林・三島由紀夫ら）を執筆陣に擁している。本誌もまた、政治的立場を異にする文学者たちを包摂しながら、日本浪漫派の伏流を支えた戦後雑誌である。

敗戦直後より伏流していた日本浪漫派の営みは、檀一雄を中心に創刊された雑誌「ポリタイア」に受け継がれる。近畿大学・世耕政隆の経済的な支えを得て刊行されたこの雑誌には、林富士馬や真鍋呉夫ら、上記の戦後雑誌の出身者らが多く名を連ねた。のみならず、全共闘運動の時代に創刊された本誌は、保田與重郎を筆頭とする日本浪漫派の言説を、戦後世代の立場から

再評価する機運を醸成した。

このように、関西から九州にかけて叢生した諸々のリトルマガジンに目を向けるとき、興味深いのは、それらが敗戦に伴って解体した日本浪漫派の受け皿となったという事実である。本企画では「光耀」「午前」「VIKING」から「ポリタイア」へと至る系譜に注目し、文学史的にはほとんど消去されている日本浪漫派の戦後を、西日本におけるリトルマガジンとその人脈を検証することによって可視化する。それを通じて、日本浪漫派の文学精神が戦後という時代といかに対峙したかを明らかにしたい。

### 〔発表要旨〕

戦後神戸のリトルマガジンと、島尾敏雄・庄野潤三など——  
「光耀」「VIKING」「タクラマカン」——

西尾 宣明

島尾敏雄は、復員直後に庄野潤三とともに神戸で「光耀」を創刊する。第一輯の「編輯後記」で、この雑誌が戦前の「まほろば」の系譜に属することと、林富士馬の人脈から三島・庄野・大垣罔司が集ったことを記し、刊行の趣旨を「いかなる世にも芸術の純美の血統たらんこと」と庄野は宣言している。「日本浪漫派」とのつながりもち、いわゆる左翼の潮流とは一線を画していたことがわかる。また、掲載された小説には戦後性が濃厚に読みとれる。三輯に掲載された庄野『居眠り王様』・島尾『夢中市街』を検証しながら、三輯までのこの雑誌の成り立ちと特性を考えてみる。発表はこれが中心となる。

一九五〇年ごろまでの「VIKING」の、同人たちの動向やその関係については、「中尾務の 島尾敏雄 富士正晴」（『脈』八四号、二〇一五年五月）に詳しい。一方で、創刊号「編輯記」で富士は「どちらの方角へ出掛けるのか（略）しばらくたてば僕等にも

判ってくるだろう」と雑誌の性格を記している。島尾など同人たちの文学的営為から、初期「VIKING」の性格を探る。

最後に、島尾と神戸市外大に学生たちによる「タクラマカン」を紹介しておきたい。この雑誌は、第一期が一号（一九五〇年二月一日）〜二号（一九五四年三月一〇日）まで、第二期として、一九九〇年四月に二三号が刊行され現在五八号まで続いている。その同人たちの名が初期「VIKING」の維持会員名簿にも認められ、同人たちの文は、当時を知る貴重な証言ともなっている。

「日本浪漫派」から「午前」への  
接続と断絶

長野 秀樹

第一次「午前」が創刊されるのは昭和二年六月、編集人は北川晃二、発行所は南風書房である。北川や南風書

房が商業雑誌発行に関係するのは戦後になってからのことであり、そうした意味では「日本浪漫派」と「午前」を直截的に両者が繋ぐわけではない。

「日本浪漫派」からの連続を考えようとすれば、補助線が必要になる。補助線の一本は檀一雄。もう一本は眞鍋呉夫。更に「こをろ」を実質的に主宰した矢山哲治（すでに故人ではあるが）。

一方で、北川が雑誌創刊に果たした役割は大きく、創刊号に掲載された「逃亡」や「戦野行旅」（第二巻四号）三巻二号）など中国戦線に取材した作品など、戦争を体験した世代の新時代へのスタートという戦後雑誌としての特徴を、それらはよく表している。

もちろん、両者が二者択一的に整理されるわけではないが、「日本浪漫派」同人としての檀の人脈が誌面作りに大きな影響を与えたことは間違いない。

佐藤春夫、中谷孝雄、芳賀檀、そして三島由紀夫。こうした名前が目次に載るのである。また、矢山の私淑した文学者の一人が旧制福岡高校の先輩後輩

にあたる檀であり、眞鍋もまた、「こをろ」の同人であった。その三本の補助線と編集人としての北川が絡み合う形で「午前」は福岡市で生まれた。北川が残した証言や、花田俊典『清新な光景の軌跡——西日本戦後文学史』（「西日本新聞」）などに拠りながら、その「絡み合う形」を考えたい。

## 「ポリタイア」と戦後のロマン派

近藤 洋太

私が東京の大学に入ったのは、一九六九年、全共闘運動が盛んな時期だった。ある時、先輩から渡された「遠くまで行くんだ……」という雑誌に瞠目した。それは、既成の新左翼の雑誌とは違う、自分たちの言葉で世界を語るうとした雑誌だった。そのなかの新木正人（一九四六—二〇一六）の「更科日記の少女」は、私を「日本浪漫派」、保田與重郎にいざなった。大学を卒業する間際、眞鍋呉夫の紹介で檀一雄が

主宰する「ポリタイア」に加えてもらった。そこでロマン派、その近傍にいた人たち、戦後、ロマン派に親近した人たちと出会った。私がそこで知ったロマン派は、想像していたよりずっとおだやかで、また激しかった。古木春哉（一九三〇—二〇〇四）の「ポリタイアに拠る」は、戦後のロマン派の復権を言った。彼は「ポリタイア」以降、書かなかった。七十歳を過ぎて「ポリタイア」の再刊を言った、書かないことにじれていた。ロマン派の核には、こうした志向があった。谷崎昭男（一九四四—）は、保田與重郎の晩年の十数年間、彼の身近にいた人で、谷崎氏の文業の多くは保田の文学の顕彰にあてられている。なかでも、近年刊行された『保田與重郎——吾ガ民族ノ永遠ヲ信ズル故ニ』は、今後、保田與重郎を研究するものにとって、必読のものと言えるだろう。私は、今日の文学の表側にはなかなか現れない、けれども決して無視することのできない、彼らについて語りたいと思う。

〔コメンテーター略歴〕  
越水治（こしみず・おさむ）  
一九五一年、大阪生まれ。立命館大

学卒。三人社社主。出版社歴約三五年。前職の「不二出版」では、富士正晴・野間宏・桑原静雄の詩雑誌「三人」や戦後福岡で発行された「午前」「文化展望」、また「サークル村」「ゼンダレ」などサークル運動の関係資料の復刻版を担当。定年後の二〇一二年一月に「三人社」を創設し、「月刊にひがた」や「月刊西日本」など戦後地方雑誌の発掘に関心を抱く。その他の復刻出版物に、戦後の詩雑誌である初期「VIKING」「現代詩」「わが青春の記録」などがある。

支部大会報告 二〇一八年度 秋季大会

十一月十日(土) 於・花園大学

■講演登壇記

海へ開かれたモダニズムと関西

根川 幸男

海／船と文学／文芸のコラボレーションを考えてもいいのではないか?! 関西支部秋季大会へお招きいただいたとき、そのように思った。私はブラジルを中心とする移民史の研究者で、文学研究はまったくのド素人である。ただ、ちょうど『海』という、戦前の大阪商船の広報誌の復刻出版を進めていて、そこには文学者や画家たちが多く寄稿していた。

関東大震災は、東京に一極集中しがちであった文壇、画壇に大きな変容をもたらした。震災によって灰燼となった大都会に出現した自動車、ラジオ、

飛行機という「近代科学の具象物」が「青年期の人間の感覚」を変容させたことを、横光利一が指摘している。

打撃を受けた東京に一步先んじて、大阪には、第一次世界大戦後の爛熟した文化が開花した。一九二五年に市域を拡張し、人口二一一人の日本最大の都市「大大阪」が出現。近代建築や公園などの都市計画、カフェやダンスホール、映画館、並木を闊歩するモボ・モガなど消費文化に支えられたモダニズム空間を生み出す。そして、それは、(海へ開かれたモダニズム)ともいうべきものであった。

(海へ開かれたモダニズム)は、田園(郊外住宅地)に住み、洋装を身につけ街を闊歩し、スポーツを楽しみ、カフェで時間をつぶし、船に乗って異郷・異国へ旅し、そうした生活を背景

に文芸作品を享受し生み出す感覚・思考や行為、といえるだろう。大大阪の繁栄を背景とした(海へ開かれたモダニズム)を体現したメディアの一つが『海』という雑誌であった。

一九二〇年代から三〇年代、大阪商船の南米東岸航路の定期航路化、それにつづく『海』による航海と寄港地の可視化により、リオデジャネイロ、サントス、サンパウロ、ブエノスアイレスという南米東岸のモダン都市は、大大阪の「対岸」として意識されるようになる。一九三九年から一九四〇年に建造された豪華貨客船「あるぜんちな丸」と「ぶら志る丸」は、そうした両岸化の象徴であった。ブラジルの現地紙 *A Tribuna* や *Diario Popular* は、二隻のモダニティとテクノロジーを最大の賛辞をもって報道している。極東と南米の二つのモダニズムは、移民船とメディアによって交差するのである。

今回の講演では、ほんやりと考えていた(海へ開かれたモダニズム)のイメージを、メディア研究や移民研究との関係でより具体性をもって考える



きつかけとなった。この機会とともに  
質問やコメントをいただいた関西支部  
の皆さんに心よりお礼を申し上げた  
い。

## ■大会印象記

### 自由発表

信時 哲郎

花園大学で行われた秋季大会では三  
本の研究発表があったが、本稿では服  
部峰大氏の「宮沢賢治「グスコブド  
リの伝記」論——雑誌『児童文学』が  
与えた視座——」を中心に概要と印象  
を記すことにしたい。

ありうべかりし賢治の自伝とも言わ  
れる「グスコブドリの伝記」は、昭  
和七年三月、佐藤一英の主宰する「児  
童文学」に掲載された。佐藤は児童  
文学でもリアリティーを重視し、ま  
た「幼年倶楽部」や「少年倶楽部」な  
どの商業ジャーナリズムに乗ったもの  
とは異なるものをめざしたが、「グス  
コブドリの伝記」の改稿は、この佐  
藤の精神によるものだったのではない  
かというのが服部氏の主張である。既  
に西田良子氏が「児童文学」に掲載さ  
れた「北守将軍と三人兄弟の医師」が  
韻律のある散文で書かれたのは、佐藤

の提唱した新韻律詩、聯に対応しよう  
としたものだと言指しているように、  
ここでも佐藤の影響があった可能性は  
高そうだ。

また、服部氏は、時代の潮流であつ  
た偉人伝の系譜とは異なり、賢治は先  
行作品である「グスコブドリの伝  
記」から英雄物語的な部分を退けて推  
敲し、グスコブド리를他者への配慮  
の欠けた人間、笑うことのできない人  
間、交換可能な人間として描いてお  
り、だから、ただ一人で、孤独の中で  
死んでいったのではないかという読み  
を展開する。

会場で聞いた後、通勤の行き帰りに  
ICレコーダーに録音しておいた音声  
を何度か聞き直したが、その度に新し  
い発見があるような奥行の深い発表  
であった。ただ、佐藤の児童文学論  
は、賢治が参考にするにはあまり  
に断片的で、おそらくは多くの文献に  
あたったのだろうが、あと、もう一つ  
だけでも補助線があればと感じた。ま  
た、笑えない男「コブドリ」という説も、  
斬新で非常に興味深いものだが、ここ  
までの大論に導くには、やはりもう一

つ補助線が欲しいと思えてならなかった。そして長くもないテクストから、これ以上、新しいネタを見つけるのは難しいかもしれないが、たとえ賢治自身の思想の深まりによって、以前は英雄的に描いていた人物を、晩年になってその人物の慢心や欠陥を批判的に推敲した例が他にもある、といったことでもあると、もっとすんなり納得できたのではないかと思った。

渡邊ルリ氏の「野上弥生子『台湾』の視座——日本人作家の視察と理蕃政策——」は、野上の台湾における言動を現地調査を含めて追いかけて、理蕃政策下の訪問でありながら、それとは異なる視点もあったのではないかとした。質疑応答の際に留学生と思われる方から日本人と漢民族では建物の建て方が異なる、という指摘があったが、文献を読み込み、現地を訪れてもわからないことというものはあるものだな、と感じた。

辻明寿氏の「龍山寺の曹老人」論——日本統治期台湾における探偵小説と台湾民俗保存活動——は金関丈夫が台北在住中に書いた探偵小説に、抑

圧されていたはずの道教が織り込まれているのは、台湾民俗の保存のためだったのではないかという発表。理路整然とした発表だったが、江戸川乱歩は「反戦的」とされる探偵小説「芋虫」について、イデオロギーとは無関係だと、自身では書いている。民俗学者・金関と乱歩を同列に扱うべきではないかもしれないが、探偵小説というものの性質から、たまたま道教が要請されただけだった可能性も考えておかなければならないように思った。

今回、三本の研究発表のうち二本、また根川幸男氏の講演も外地に関わるものだった。特集というわけではないようだが、近年は外国人研究者の質の向上と量の増加、アーサー・ビナードや三木なずなのような日本語で書く外国人作家の増加、多和田葉子のような在外日本人作家も増えており、わが関西支部も「ようやくここまで来た」ということなのかもしれない。日本近代文学会に、当然のごとくに冠せられている「日本」の意味を、改めて考えてみるべき時なのかもしれない。

## 自由発表

竹松 良明

研究発表三件のうち「宮沢賢治『グスコープドリの伝記』論」については、もうお一人の印象記担当者が宮沢賢治研究の専門家であるため全面的にそちらに任せたい。

渡邊ルリ氏の「野上弥生子『台湾』の視座——日本人作家の視察と理蕃政策——」は、この数年のうちに弥生子の旅程を確認する現地調査を何度も行なってきた研究成果の集大成的な発表である。戦前期における台湾への紀行作品としては主要なもの一つに挙げられながらも、積極的な再評価の対象とならずに棚上げされてきた、という印象が付き纏いがちな作品と思われるが、本発表はそのような位置づけの一因とも見るべき微妙な問題に即しつつ、昭和一〇年秋の台湾旅行における弥生子の真摯な思念を存分に伝え得ている。

発表内容は、①弥生子の台湾訪問——現住民への関心と総督府側の対応、②

原住民との面会（太魯閣・花蓮・大武・鵝鑾鼻）、③霧社事件に関する記述、となるが、①に関しては「台湾日日新報」の弥生子の台湾來訪を伝える記事、「台湾愛国婦人新報」の弥生子の座談会の記事、「台湾時報」の河崎寛康による弥生子への批判などが詳細に確認されている。②では「台湾総督府及所属官署職員録」によって、花蓮の薄薄公学校准訓導の坂田基明について確認したこと、また大武公学校の教員心得であった嘉茂君子について上記「職員録」による確認及びその長男である許幸雄氏への二度の聞き取り（二〇一三年三月、二〇一七年八月）などが自ずからその綿密な調査状況を語っている。

渡邊氏は「まとめ」で、弥生子には「台湾や理蕃政策への問題意識はほとんど」なく、坂口襍子のような「民族的アイデンティティを問いつけた姿勢とは次元を異にし」、「北村兼子の社会問題意識にも及ばない」と言うが、河崎寛康が批判した弥生子の「今後も尚蕃人教育を警官の手に委ねてゆくとす

れば、そこに何等かの矛盾」があるという意見は、現在の眼で見れば順当至極のものであり、翻って弥生子の台湾紀行の核心にある原住民へのヒューマンな眼差し、それは「台湾に來てもつとも強い魅力で私を引きつけたのは彼らである」という言葉に集約されるが、慈愛溢れるその眼差しこそはこの作品に指摘されがちな全ての物足りなさを補って余りあるものではないだろうか。

辻明寿氏の「金閨丈夫『龍山寺の曹老人』論」は、戦前の台北帝国大学医学部で形質人類学に従事しながら、雑誌「民俗台湾」を創刊して台湾の民俗を研究した金閨が、林熊生の名で発表した台湾初の本格的探偵小説について論じたものである。この作品は既に浦谷一弘（二〇〇四年）、河尻和也（二〇一六年）によって論じられているが、いずれも曹老人に日本帝国主義者の体質を厳しく見定めている。従来の戦前期台湾の日本語文学作品史ではほぼ水面下に位置づけられていたこの作品が特に注目されたのは、本の装丁者

としても活躍した金閨の多彩な能力の一端として成立したこの作品の先見色が後代の研究者の食指を誘うためと推測されるのであり、その意味でも同時期の台湾文学史における金閨の位置づけそれ自体を、これを機会に明確に定めておくことが必要になると思われる。

講演「大正震災後、関西文芸の海洋体験」

高木 彬

根川幸男氏の講演「大正震災後、関西文芸の海洋体験」は、大阪商船の広報誌『海』を手がかりとしながら、一九二〇―三〇年代における関西の文芸が「海洋体験」を通じて何を獲得したのかを示したものだ。

関東大震災後の海運業界の活況と、「大阪」のモダニズム。両者がクロスするところで一九二四年に発刊された『海』は、関西在住の、あるいは震災後に「西遷」してきた文学者や芸術

家を「海洋体験」へと誘い、彼らに作品発表の場を提供したと根川氏は語った。『海』は、都市の消費文化を享受し、船で海外を行き交う新しい感性とライフスタイルを背景とした、〈海へ開かれたモダンイズム〉(根川氏)を牽引したのだという。

その事例として根川氏が挙げたのは、船上の風景を切り取った北村兼子の紀行文、稲垣足穂・富田碎花・竹中郁・崎山猷逸らによる船上座談会、震災移民を背景にブラジルへ渡航する作家たちによる短詩形文学だった。既に発って、未だ着かない。船上という「宙吊りの時空間」(日比嘉高「船の文学」——『あめりか物語』『船室夜話』、『文学』二〇〇九・三)は、既知の風景を新しい眼差しで捉え返し、表現の幅を拡げるものだったと根川氏はまとめた。

質疑応答では、たとえば、『海』の文芸関連記事を通覧すれば関西よりも関東の書き手のほうが多く、やはり全国誌としての側面が強かったのではないかという意見があった。根川氏

は、むしろそれは、大阪を拠点とする『海』というメディアの吸引力を示すものでもあるとした。また、当時の「観光」概念の形成と大型船の新造との関係性についての質問もあった。根川氏によれば、一九二五年あたりから旅客に配慮した空間設計の貨客船が登場しはじめ、同じく『海』も、「観光」を前面に打ち出す誌面を構成していたのだという。

個人的には、一九三五年の吉林丸での船上座談会の話題にとくに興味を持った。竹中郁が船室を「陸上の贅沢な住宅と同じ」で「あまりにモダンすぎて」「船の感じがしない」と批評したのに対し、稲垣足穂は「もつと大きな船だつたら桃山の間とか、室町の間とかいふものをこしらえてみたら」と空想したという。そこには、神戸ゆかりの両作家におけるスタンスの差異が窺えると同時に、モダンからその超克へと向かいつつあった同時代の片影も認められるかもしれない。根川氏が足穂の発言をうけて船室インテリアの「現代日本様式」(日本の伝統と西洋の

現代との折衷様式)を紹介したとき、私は、当時の陸上の建築界において、伝統(日本)とモダン(西洋)とをいかに止揚して現代日本独自の様式を確立するかという議論(「我国将来の建築様式」論争、「帝冠様式」論争、など)があったことを思い出した。壇上で根川氏はしばしば「一緒に研究をやりませんか」と呼びかけていたが、その言葉どおり講演は、多方面へ開かれた、風通しの良いものだった。

山口直孝 編

## 『漢文脈の漱石』

服部 徹也

齋藤希史『漢文脈と近代日本』

(二〇〇七・二〇一四。副題省略、以下同じ)は鷗外を一貫した漢文脈の作家として位置付ける一方、漱石を特異な位置に置いていた。漢文脈から脱して小説を書き(『草枕』さえその過程を現わしているという)、修善寺の大患以降、漢文脈の外部からそれを再構成して西洋文明への対抗原理としようとした漱石。しかし、朱子学という完結した秩序に根ざす「漢文脈」(そのパターンとして「士大夫」意識や、それとの緊張関係を有する「隠逸」がある)にとって、外部への対抗は原理的にありえない。どれだけ漢詩を書き、あるいは作品に漢籍由来の言葉や巧みに鏤めていたとしても、西洋文明への対抗を企てる漱石は漢文脈の外部に

立っているのだという。

では本書がタイトルに掲げる「漢文脈の漱石」とは、作家の生い立ちから最初期の作品までを指す狭い言葉に過ぎないのか、右記の見立てを覆し「漢文脈」概念への批判的応答を企図する挑戦的な表現であるのか。

良質な九本の論文からなる本書から評者の得た知識や、教えられた論点は多い。しかし、右の問題が等閑に付されている印象は否めない。いみじくも所載の齋藤論文が「漱石と漢詩文」と題したように、本書は漱石が触れた漢詩文についての知識を読者に提供し、作品解釈を刷新することを目指している。つまり「漢文脈」概念なしで成り立つ議論である。それを理論的後退と捉えるか、啓蒙的で着実な研究の蓄積

を喜ぶか。評者はその両方でありたい。

本書の白眉というべき合山林太郎「漱石の漢詩はいかに評価・理解されてきたか?」は漱石漢詩のうち殆どが没後刊行である点に釘を刺し、漱石漢詩についての評価が「個性」や「思索」に偏重してきたのに対し「明治時代の詩人と漱石とが共通の知識基盤を持ち、語彙などに類似性が見られる」点に注意を促す。「漱石と漢詩文」研究の未来がデータベースを活用した語彙調査にあるとすれば、その成果は「漢文脈の漱石」研究、あるいは漢籍を起点に、近代作家とエクリチュール<sup>g</sup>の問題系を再考するプロジェクトをどのように賦活しうるのか。本書を囲んで中国や韓国の研究者と議論することができれば、その意義は何倍にも高まるだろう。

(二〇一八年三月二〇日 翰林書房  
三〇〇〇円+税)

## 日本近代文学会関西支部編集委員会 編

## 『異』なる関西

## 日本近代文学会関西支部『異』なる関西』編集委員会

本書は、日本近代文学会関西支部による連続企画「『異』なる関西——1920・30年代を中心として——」（全四回）の成果をまとめたものです。

この連続企画のねらいは、(一)一九二〇・三〇年代の「関西」に育まれた文芸文化を主たる対象に、(二)埋もれた歴史資料や文化資源を発掘しつつ、(三)人・メディア・社会現象などの関係性を横断的かつ立体的に再構成すること、(四)人々が自明としてきた「関西」イメージや認識の枠組みを根本から問い直すことにありました。本書も、そのコンセプトを引き継ぎ、さらにテーマや領域を再構成することで、既成の「関西」表象を差異化し、更新することを意図しました。以下、本書の「まえがき」に依拠しつつ、その概略を紹介します。

そもそも「関西」とは、「関東」との対比によって形成された地理的概念でした。もとは「畿内」と認知されていたものが「関西」へと相対化される経緯には、明治維新と東京奠都（遷都）によるドラスティックな構造転換や、政治・経

済・文化の東京一極化が大きく関係しています。「関西」なる自己像は、そうした歴史的文脈のなかで形成されたものでした。

一方、両大戦に挟まれた一九二〇・三〇年代の日本は、関東大震災による甚大な被害にもかかわらず、世界規模の経済変動を背景に、急激な産業化・都市化を推し進めました。それに伴う社会基盤の変化は、そこに住む人々の生存の条件を根本的に変えていきました。こうした社会変動は、「関西」ではいつそう顕著で、以前から「東洋のマンチェスター」と呼ばれていた大阪が、市域を拡大して東洋一の「大大阪」を形成し、一九二五年に「大大阪記念博覧会」を開催したことは、それを象徴する出来事だったといえます。「関西」に育まれた文芸文化も、こうした急激な社会変動にに応じて多種多様な動きを見せました。

その実態を明らかにするには、「関西」の文芸文化を担った当事者に注目する必要があります。もちろん当事者といっても一様ではありません。「関西」出身でありなが

「異」なる関西  
"i" naru kansai

日本近代文学会関西支部  
編集委員会編

—1920・30年代を中心として—



織田作之助、直木三十五、中上健次、賀川豊彦、横溝正史～熊野・大逆事件、神戸モダニズム、阪神間の建築……  
主として文芸作品を対象に、人・メディア・社会を横断的かつ立体的に再構成することで、既成の「関西」のイメージを覆した、まったく新しい「関西学」の誕生！

田畑書店

ら中央文壇において戦略的に「関西」を捉え返した者、日本統治下の東アジアなど「帝国」内外の各地から「関西」に流着し、そこに根ざした生活や労働から表現へと向かった者、映画・新聞・雑誌といった各種メディアに関与して情報発信の可能性を探り続けた者……。彼・彼女らが移動し、交差し、すれちがったポイントを見定めることが、本書の重要な課題でした。

そこでまず第一章「移動と差異化」では、移動する表現者が既存の「関西」表象の代案を構想する現場に密着しまし

た。続く第二章「場と営み」では、「関西」を構成する場と、そこに離合集散する人々の文化的営為や生存の行方に光を当てました。さらに第三章「メディアと文化環境」では、地元メディアの実態調査から「関西」の文芸文化と読者（大衆）とのかわりに迫りました。そして第四章「散種されるモダニズム」では、「関西」ゆかりの表現者たちの走行軌跡から「阪神間モダニズム」の群像と多層性を問い直しました。また、各章の末尾には、本書のコンセプトを補完する四つのコラムを収め、巻末には、詳細な人名索引、団体・組織名索引、文献・資料名索引、地名・施設名索引を用意し、横断的な検索を可能にしました。

本書のどの頁をめくっても、未知の「関西」に出会えるはずです。とはいえ、収められた諸論考は、けっして単一の「関西」を結像させることはありません。複数の異なる「関西」による「異」なる関西——読者には、その迷宮を存分にさまよっていただきたいと思えます。

(二〇一八年十一月五日 田畑書店 二八〇〇円＋税)

会議の記録（二〇一八年度）

四月二十二日（日）

【運営委員会】二〇一八年度春季大会について（プログラム、タイムテーブル、当日の運営について、印象記執筆者、当日の役割分担）、二〇一九年度春季大会の企画について、二〇一八年度秋季大会について（自由発表公募について、今後のスケジュール）、会計報告・予算について（二〇一七年度会計報告、二〇一八年度予算案、二〇一七年度関西支部運営特別基金予算）、会報二八・二九号について（編集について（進捗状況・スケジュールなど）、二八号書評対象図書、二八号以降の書評、紹介対象図書）、次期支部長選挙について、委員の役割分担（チーフ制度導入）、二〇一八年度年間スケジュールの確認、その他。後日「会報」第二七号発送作業。

〔同志社大学〕

六月二日（土）

【運営委員会】春季大会タイムスケジュールおよび役割確認、二〇一八年度秋季大会および企画について（花園大学二〇一八年十一月十日（土）予定、自由発表公募について、今後のスケジュール）、各担当からの報告・確認事項等、総会について（議長候補の選定）、会計報告・予算について（二〇一七年度会計報告・二〇一七年度関西支部運営特別基金会計報告、二〇一八年度予算案・二〇一八年度関西支部運営特別基金予算）、会報について（第二八号各原稿メ切等スケジュールの確認、第二九号誌面構成について、第二九号書評・紹介対象図書・執筆者について）、次期支部長選挙について、今後の大会の企画について（二〇一八年度秋季大会の準備、二〇一九年春季大会（新企画）にむけての準備）、各委員の担当（チーフの役割）、その他（二〇一八年度役員、会員異動等）、今後のスケジュール。

【総会】新運営委員紹介・承認、二〇

一七年度事業報告・その他の報告事項、二〇一七年度会計報告・二〇一七年度会計監査報告・二〇一八年度事業計画（『異』なる関西）の進捗状況）・二〇一八年度予算案・その他の審議事項（次期支部長選出）。

〔京都大学〕

七月二十二日（日）

【運営委員会】二〇一八年度秋季大会について（二〇一八年十一月十日（土）、花園大学、タイムスケジュールについて、自由発表について、講演者決定）、二〇一九年度春季大会について（日程および会場校について（奈良女子大学）、会場校への連絡・スケジュールの確認について）、企画について（二〇一九年度春季大会企画案の検討、企画ワーキンググループの結成について、今後のスケジュール方針）、会報第二八・二九号について（第二八号各原稿メ切等スケジュールの確認、第二九号誌面構成について、第二九号書評・紹介対象図書・執筆者



について、会報のメール配信について)、その他(運営副委員長の設置について、運営委員の研究発表について)、今後のスケジュール。

〔同志社大学〕

九月二十九日(土)

【運営委員会】二〇一八年度秋季大会について(タイムテーブルの確認、会報等印象記執筆者依頼、役割分担、運営委員からの報告の内容について)、二〇一九年度春季大会について(プログラムについて(企画)、その他)、会報二一九号について(二九号進捗状況、書評・紹介候補について、巻頭言、二〇一九年度春季大会企画趣旨文、二〇一九年度春季大会発表要旨、二〇一八年度秋季大会登壇記、二〇一八年度秋季大会印象記、新刊紹介、会議の記録、二〇一九年度春季大会研究発表募集、事務局便り、三〇号以降の書評候補について)、新運営委員の人選について、『異』なる関西』について木田隆文編集委員長より、そ

の他、今後のスケジュール、後日「会報」第二八号発送作業。

〔同志社大学〕

十一月十日(土)

【運営委員会】二〇一八年度秋季大会について(タイムテーブルの確認、印象記執筆者の確認、役割分担、運営委員からの報告の内容)、二〇一九年度春季大会について(六月八日・奈良女子大学、企画「日本浪曼派の戦後と西日本発のリトルマガジン」、企画趣旨文の確認、登壇者の人選について、今後のスケジュール・発表題目および要旨のメット二〇一九年一月三十一日)、『会報』二一九・三〇号について(二九号進捗状況、三〇号以降の書評候補について)、新運営委員の人選について(運営委員の交代について、運営委員長との交代について)、その他(『異』なる関西)出版に関する諸費用について)、今後のスケジュール。

〔花園大学〕

十二月二十二日(土)

【運営委員会】二〇一九年度春季大会について(二〇一九年六月八日奈良女子大学、自由発表、企画趣旨文、登壇者確定、タイムスケジュール、総会について)、新運営委員について(新支部長・佐藤秀明、新運営委員長・磯部敦)、二〇一九年度秋季大会について(会場・神戸大学、今後のスケジュール)、二〇二〇年度春季大会について、会報二九・三〇号について(二九号進捗状況(書評等)、三〇号以降の書評候補について)、その他(『異』なる関西)について、自由発表の審査に関して)、今後のスケジュール。

〔同志社大学〕

二月二十四日(日)

【運営委員会】二〇一九年度春季大会について(二〇一九年六月八日奈良女子大学、「日本浪曼派の戦後と西日本発のリトルマガジン」、趣旨文・発表題目および要旨の確認、自由発表の審査・発表者決定、タイムテーブル)、

二〇一九年度秋季大会について（二〇一九年十一月十日・神戸大学、企画案、自由発表者の公募について）、「会報」編集作業と確認（「会報」第二九号編集作業について、第三〇号での書評候補・紹介候補について・各担当者、その他のスケジュール）、二〇二〇年度大会会場について（春季候補・大阪市立大学）、新年度運営体制について（新運営委員の退任と補充について、運営委員の候補者について、運営委員会の引継ぎについて）、その他、今後のスケジュール。

〔同志社大学〕

三月二十四日（日）

【運営委員会】今後の予算について、二〇一九年度春季大会について（二〇一九年六月八日奈良女子大学、プロگرام、タイムテーブル、当日の運営、総会について）、二〇一九年度秋季大会について（企画案の検討、趣旨文、企画の形式について、自由発表公募について、今後のスケジュール）、二〇

二〇二〇年度春季・秋季大会について（開催予定校の確認）、会報二九・三〇号について（三〇号編集の進捗状況・書評・スケジュールなど）、次年度の運営体制・役割分担に関して（新任委員参加）。

〔同志社大学〕

\*二〇一八年度役員

支部長 浅子逸男  
運営委員長 木谷真紀子  
運営委員 荒井真理亜 泉谷瞬  
磯部敦 奥野久美子  
梶尾文武 加藤邦彦

川畑和成 黒田俊太郎  
斎藤理生 白方佳果  
瀧本和成 田口律男  
田中裕也 中谷いずみ  
深町博史 福岡弘彬  
増田周子 松澤俊二  
三品理絵 村田好哉  
山本昭宏 山本歩

最近、支部会員の皆様が刊行された書籍の事務局への献本が減っておりま  
す。ご著書を刊行された方は、裏表紙  
「事務局便り」をご参照の上、ぜひ事  
務局にご献本ください。

## 事務局 便り

### ○ 献本のお願

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

● 対象となる書籍：支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

● 送付先：関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

### ○ 維持会費納入のお願い

維持会費の納入がたいへん少ない状況です。同封の振込用紙で、ご協力のほど、何卒よろしく願います。

### ○ 関西支部二〇一九年度役員（\*は新役員）

\*佐藤秀明（支部長） 磯部敦（運営委員長） 荒井真理亜 泉谷瞬 奥野久美子 梶尾文武 加藤邦彦  
川畑和成 木谷真紀子 黒田俊太郎 白方佳果 田口律男 田中裕也 \*中田睦美 \*長濱拓磨 \*開信介  
深町博史 \*藤原崇雅 増田周子 松澤俊二 三品理絵 \*光石亜由美 村田好哉 山本歩

### ○ 日本近代文学会関西支部事務局

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部 磯部敦研究室内

（※事務局が変更となりましたので）注意ください  
e-mail: kindaikansai@gmail.com

二〇一九年度 関西支部秋季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇一九年度秋季大会における自由研究発表を募集いたします。支部会員の皆さまの積極的なご応募をお待ち申し上げます。

日時・会場 二〇一九年十一月一日(日) 会場・神戸大学 瀧川記念学術交流会館

※詳細は決定次第、関西支部ウェブサイトでお知らせいたします。

募集人数 若干名

応募締切 二〇一九年七月一日(水) 必着

応募要領 発表題目および六〇〇字程度の結論まで書かれた要旨を封書でお送りください。

必ず連絡先(電話番号・メールアドレス等)も明記してください。

発表時間は三〇分程度です。

採否については、運営委員会で決定次第お知らせいたします。

発表に関してご不明の点は事務局までおたずねください。

【応募先】

〒 630 | 8506

奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部 磯部敦研究室内

日本近代文学会関西支部事務局